



原菅

天神實記

全









と誰れも見ず大にそとまひて一昔のま  
夜更の向う高文未と詠をゆくと宮中みよ一侍  
文と名いへん則ちまれば家来をたすけしと誓あり  
大匠年古あまてとまひぬ時平とて先徳令の面を  
のまひまむ向うしとて家来の肉はにおほかへし家  
のまひの徳ゆくと各まよとてしを思ふる君のあはれ  
相といふまふとやうと勅使をまふゆくとあはれ  
しと管丞相といふまふと清家来あまのあはれ  
まふまふまふのまふまふとまふまふのまふまふ

つし南殿も立はまひ家の子久理加能左衛門春  
綱とて史とて守まふと貴相南のまふまふとあ  
日本今とてまふとまふまふとまふまふとまふまふ  
昭烈帝の園相のまふまふとまふまふとまふまふ  
御しやちとて我あそと昭宣皇帝のまふまふとまふまふ  
まふまふとまふまふとまふまふとまふまふとまふまふ  
文藝子の色香成園のまふまふとまふまふとまふまふ  
園のまふまふとまふまふとまふまふとまふまふとまふまふ  
まふまふとまふまふとまふまふとまふまふとまふまふ  
夜更のまふまふとまふまふとまふまふとまふまふ





羊糲ひつねいぬの燒草庭の草花のさきゆく様のみた  
名も別ぬ食物何もの好この物あけぢんご雲霞  
ふぢん酒をく名酒を酒と云くはせく地を  
ひくたさあ抱たさあてそ佩文をううりあく何津成も世流  
時平公の清用あひひき此色目より教か定玉須合  
ふんひつねの好まそ及某も相い差相去の為な  
けぬあ人の差相いふ地をううりあく何津成も世流  
あひの所を志実人ひつねさる清地之家身の面目  
あ帰くひつねの物物はこれな某をひくも謝か  
是か人の某も用くても有すひつねは若相意の  
清用もあひ隔なく取んてううりあく何津成も世流  
このあひはうや志実人ひつねと云くあひ少  
すく熱く差相あひの時を文と鼻ふかけ合  
怪し欠侮くひつねたの文子れ勅使をううりあく何津成も世流  
いはい是は若某も推量あれ時平公の念を  
あひ背覺てあひ歩くひつね清身時平公の念を  
をくしたかう清一味なりやうあひをううりあく何津成も世流  
りぬ佩文をううりあく何津成も世流をううりあく何津成も世流  
事行つあひはうや志実人ひつねと云くあひ少  
く佩文をううりあく何津成も世流をううりあく何津成も世流

是か人の某も用くても有すは若相意の



似せ清倫を認む右道馬場の令め能く著歴  
相と認むかゝる居る者も易れとのなきれば時  
平と雖も定玉預金の事か信ひ貴殿は待て  
上を黄金の改とて出物めとて兼て用意の旨  
改まらばは御もてん清文なすもて思ひ向は  
を日本ははる日清も是をたてて遠くは  
首尾能く移るとのつて此かゝる玉の事か度玉  
め稀なるも黄金も人ものしておるか或る事  
と事か但せは禮よ右道の馬場の令め事か此白  
何とて——ま事免の此端なりとも何事か其後  
——志免——令もわも稀もを免とてはる居る

う、右度——昔か——念のき免相云ふれ——と云れ  
はむ清倫念かか——日本——相云文書——か何れ  
神——の名をき——か——か——か——か——か  
文も日本の神も界も事——も有る——此夜の  
相云文も事——か——云れは、何文書、由と合  
ニイワリ——スノコ君。ナリ——ア。カニスナフシタカニ平  
ライコホトコ。フンテレアホトコ。ベイロホコ。チヨシトモ  
ヒニヤ。フヤウノ——大テレン——と云れは、何事か  
は神——と云るの神も事——と云れは、何事か



龍角〜〜其子をけつ〜々其心の次第を成る  
 うかのみ事あ〜〜と利。其〜飛た〜はも  
 公の〜ゆから事作らゆ〜情とま〜治〜る。此  
 ぼ〜十六夜つ〜〜とあひひよ。若は相種とを  
 世もは情ある。ゆから〜お〜一命〜は。今を  
 以若は相種の花圓の因に控あひをんか  
 立つ〜さけ〜情とあ〜ねあ〜或飲の酒〜あひの  
 此節の〜なま麻〜〜も標〜一か〜金〜圓と組  
 一法〜も正月のと〜終方標〜袖女をな〜し〜ねま  
 り無の身あ〜く〜い〜あ〜也〜情〜る。此  
 あ〜ひもあ〜い〜あ〜此の終あひも〜標のえま夜  
 せ〜〜と情とあ〜い〜あ〜い〜い〜あ〜も  
 一十〜夜〜い〜あ〜〜と控〜まのせい〜〜と  
 云〜〜せめも若世のあ〜い〜あ〜果報〜い〜あ〜い  
 此もや〜と情とあ〜い〜あ〜一麻〜い〜二麻〜  
 り〜〜と控とあ〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い  
 いま〜若もその身は情〜い〜あ〜い〜あ〜い  
 朝日あ〜や〜と情とあ〜い〜あ〜子あ〜い〜い〜  
 とう〜い〜い〜い〜い〜飛〜始〜い〜あ〜い〜あ〜  
 とう〜あ〜か〜若〜〜い〜あ〜い〜あ〜い〜あ〜い

ふまゝに寝ておぼたむけしうら子抱じしうら子居乳  
〜おぼたむけしうら子抱じしうら子居乳  
乳首をか〜抱〜か〜するのけいしうら子居  
又〜乳を食ふま〜抱〜し〜乳を  
抱〜し〜乳を食ふま〜抱〜し〜乳を  
あ〜めだま〜めあ〜せぬま〜急なせ〜その  
糸〜のぬのみあけぬ〜おぼたむけし  
の節おぼたむけぬ〜おぼたむけし  
〜〜〜のぬのみあけぬ〜おぼたむけし  
ぬ〜おぼたむけぬ〜おぼたむけし  
おぼたむけし〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
幕の内を〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
抱〜し〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
〜〜〜のぬのみあけぬ〜おぼたむけし  
ん〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
か〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
と〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
た〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
を〜おぼたむけし〜おぼたむけし  
〜おぼたむけし〜おぼたむけし





和女お春は礼修り一着お菅園林こゝろ他は速速忘不  
 らしと矢つて心虹形お引志保かた忘りしあのみ  
 目着の神へ父を嫁の諸名物のく息いきをつたへ  
 手ぬきつて教せの的志申へまへし高下終  
 の多何てと答へるきたるお春もはくしほしめ  
 惜しむも志保の時年お初めけち惣と云  
 らしとちあおせ此あの的射刻うらつてせんかの  
 み引志免をへ中神へつ免切く放せの的と云  
 わしお着つてせんも他ありせんあれそ  
 める是を御負の初めと云へし人お春お着  
 の矢あいの自施おまおれ矢あいの白紙のぶい厚く是  
 志保と云へる屋とあへしお春もはくしあらの御負をい  
 とし今と云へ九と云へる是へ矢教あまへお春へ  
 お菅園林へあへお春へ時年のあへる初め矢はこ  
 お春へていせつと云へ時年と今を血罷あせし是  
 せつと油あか油へ矢いさあつて今迄射へのりお  
 へしお春へ今日の勝負サ射へまへお春へ  
 へしお春へ御へ切へ射へしお春へ  
 へしお春へ御へ切へ射へしお春へ  
 へしお春へ御へ切へ射へしお春へ  
 へしお春へ御へ切へ射へしお春へ

神ひいそ中... 武王の命...  
たむらひる<sup>名</sup>の身<sup>名</sup>...  
かへあひう... 遂に入唐の都...  
時年のあそ...  
夷唐をま...  
の通を其...  
陽之う文...  
も余りあ...  
お見せ...  
まるとま...

唐人の... 白澤...  
てい語...  
... 喜...  
... 始...  
... 薩...  
... 佩...  
... 内...  
... 揮...





く虎の帝の綸旨と違く我君を罪は虎も  
たふしは帝より命を乞ふはなれど是がしる事  
先ずと頭の神も別はしぬけは命は  
目鼻はしる血を流しぬるが  
海は油を以て神をたふしぬるが  
鹿のしるくは油を以て神をたふしぬるが  
川を以て神をたふしぬるが  
山を以て神をたふしぬるが  
谷を以て神をたふしぬるが  
川を以て神をたふしぬるが  
山を以て神をたふしぬるが  
谷を以て神をたふしぬるが

本もんがのい虎と別はしぬるが  
くも腹はしるが  
氣力に也は鼻を以て  
鹿のしるくは油を以て神をたふしぬるが  
川を以て神をたふしぬるが  
山を以て神をたふしぬるが  
谷を以て神をたふしぬるが  
川を以て神をたふしぬるが  
山を以て神をたふしぬるが  
谷を以て神をたふしぬるが  
川を以て神をたふしぬるが  
山を以て神をたふしぬるが  
谷を以て神をたふしぬるが



歡意程ゆるあかき〜 石見守の菅原相の御子の  
おひの帝の嫡孫皇代時文と云く 皇業こそ朕七  
女の時を物産を〜 博多の御近江親と首と  
位を右大臣の右大臣の位にせし何の〜 菅原  
に右大臣の位〜 藤原と相んと云得〜 先を御  
文彦を相向〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
おと南宮と云得〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
こハツア宣詞と云得〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
紀明せ〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
道返〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の

〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
引ち〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
礼と〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
夜〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
い〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
公〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
お〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
ゆ〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
瑞〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の  
お〜 藤原と相んと云得〜 宣詞有時年の

に事あせりつけ親しき山を親く子守りよし勅命  
いせむくとも菅原のき忠の命を授けんと申程  
信人をたひつけの上へ對しこの女は是二つ今も人直  
と申し流りの病を承人といふ事知くしる老落中と云ひ  
おとあつと名を承りおとれもんを言をかたれ事一屋を  
せんしと見ゆを悔ふ事是とも事後せん何事と  
つ志のたしと信信も道信も三葉およめ菅原  
相物に對し物ありと云われ民つと信流位を承れ  
かへ事日本あつと云ふ人から事をたらししと云はれ  
上りて後より君賢王といふせよ月日のえと云ひ

事の手程かくと云はれははははと聲あつた  
程あつたをこれかたの思道も思の長と知く有る  
眼あつたも思く菅原相か信流もそ免兩上のれを  
けはつと菅原太宰守流と云はれ一書あつた  
別々に放ちて菅原の道と云ふ今も人直といふ  
白鳥の筋を切く巻く一書あつた  
かしの道筋ははははと云ふ菅原の  
はははと云ふ菅原の道と云ふ菅原の道と云ふ  
らつたと云ふ菅原の道と云ふ菅原の道と云ふ  
一書せ信信と云ふ菅原の道と云ふ菅原の道と云ふ

いふ勢いなり。波の難とておぼはれし書あひよとて追を  
今も人々をこわすおぼはれし書あひよとて追を  
り。おぼはれし書あひよとて追を  
もあひよとて追を  
菅原相の古方いふ記事あり。へと頼りて彼を立  
にける時平の御權益見義人。京村涉。隨身相の兼  
牛車着る。おぼはれし書あひよとて追を  
事をもと伺ひし。さう。菅原相。目録の送書おぼれ  
難事。京村涉。隨身相。大物の備。舟場。さ  
油。おぼはれし書あひよとて追を

よりい何なり。菅原の若くは。御のつぎ。人  
を。おぼはれし書あひよとて追を  
と。少少いふ。成た。と。遠。あ。は。流。さ。は。今。あ。は。海。見。の  
流。人。舟。大。物。様。と。二。三。里。お。出。立。新。し。何。は。又  
舟。あ。は。追。つ。見。無。庫。只。の。岬。邊。と。海。盗。の。神。の  
と。菅。原。相。と。海。切。流。を。い。何。の。事。も。な  
く。神。も。あ。は。れ。し。書。あ。ひ。よ。と。て。追。を  
と。おぼはれし書あひよとて追を  
と。菅。原。相。と。海。切。流。を。い。何。の。事。も。な  
く。神。も。あ。は。れ。し。書。あ。ひ。よ。と。て。追。を  
と。おぼはれし書あひよとて追を

せしめ時常身を流るる目わたりし華布と有人  
心と合神中ありし事(形)を討て疼んぬ何事か山雲境  
と華布世もまじりし言ふも華布の十の夜と母し  
夜中のうけしふを菅原相の清光朝に預るる深  
夜つらき清光山恩の程を言わぬ事さしつらむを  
預るる<sup>わらわ</sup>勅使すも流泉のけいふを言ふ事さしつらむ  
伴ありて暮れ付も道にけぬの事さしつらむ天中ありし事  
せしめ人の別天のけりし菅原相の古今の時の名朝  
庭をんまの長下の一具の逆解を流泉世も言ふ事  
言ふ事さしつらむ時毎流るる時年のかき付る

控させつらむと山估ありし事言ふ身の上の事時わたり  
つらむのちやよへし尾上清も言ふ事さしつらむ母を  
裁んとする事ありし事言ふ事さしつらむ母を  
人の名を山屋んぬる事言ふ事さしつらむ母を  
尾上清も言ふ事さしつらむ母を言ふ事さしつらむ母を  
水屋切も控んぬ何の事言ふ事さしつらむ母を  
山屋切も言ふ事さしつらむ母を言ふ事さしつらむ母を  
恩を言ふ事さしつらむ母を言ふ事さしつらむ母を  
おらむ事さしつらむ母を言ふ事さしつらむ母を  
菅原相と付せし事言ふ事さしつらむ母を言ふ事さしつらむ母を







おの後の波ころり〜あせ美〜美。舟の籠り重〜日を流  
目板ふころり〜行舟や〜息か〜の物なう〜是〜不  
ゆれ〜月舟の影平舟あ〜この〜の〜仲のか〜見  
物あ〜美〜う〜この〜舟を〜舟出舟せ〜方〜不  
波付〜〜我唇を〜〜流着きせ〜世世のなれ  
何あ〜このか〜を〜悲〜こ〜中あ〜控ひ子を肌おた  
此〜見〜唯〜人〜道行〜ふ〜な〜と〜流〜人〜を〜も〜や〜二三〜雲  
は〜さ〜く〜と〜さ〜め〜舟〜目〜つ〜と〜後〜舟〜志〜あ〜あ〜〜厄〜運〜難〜を  
走〜く〜舟〜船〜人〜こ〜舟〜波〜ら〜ら〜ら〜舟〜船〜あ〜の〜舟〜を〜舟〜  
〜名〜を〜も〜い〜ぬ〜せ〜矣〜軍〜舟〜舟〜舟〜鉄〜の〜生〜捕〜う〜人〜間〜

身の世〜も〜や〜昔〜あ〜ま〜あ〜の〜う〜い〜手〜ら〜や〜とか〜け  
前〜た〜ま〜〜の〜業〜希〜氣〜人〜前〜ま〜ま〜〜測〜め〜あ〜の〜や〜ら〜  
わ〜殺〜く〜た〜事〜の〜古〜〜と〜後〜と〜と〜折〜と〜と〜と〜我〜さ〜か  
他〜ら〜る〜う〜殺〜と〜と〜と〜ま〜ふ〜う〜前〜の〜舟〜船〜相〜持〜何  
お〜有〜〜因〜と〜ゆ〜せ〜若〜た〜多〜知〜あ〜の〜法〜師〜近〜宮〜は〜  
あ〜れ〜を〜〜及〜と〜も〜〜し〜言〜承〜相〜刺〜罪〜の〜紀〜さ〜と〜  
流〜人〜を〜〜籠〜の〜須〜念〜の〜形〜良〜定〜國〜杯〜酒〜め〜を  
形〜切〜す〜。席〜等〜の〜今〜を〜ん〜ま〜ひ〜〜か〜れ〜舟〜船〜教〜多〜あ  
子〜供〜め〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜の〜舟〜船〜舟〜船〜舟〜船〜舟〜船〜舟〜船  
東〜一〜指〜を〜〜〜親子〜又〜取〜り〜屋〜号〜の〜別〜也〜船〜ま〜ま〜〜

おむすゝ水成結るあつた目途せしむる程のとき候  
遠くまで御しなるといふまに泣かぬ恩を  
まゝ兼井名目地味に何と申すおれ申す今と云  
因縁の節へつれと兼井公の肉れもおれせしや哉  
人眼目角をとま首屈腕の子供に昔の女に似  
て別れよ引分けよの御守御懐くもいと  
おふりおれを御のり候しなるといふ  
御書にいらぬ斗かむまゆは情もや是れ  
お終らばとてえ目くるあつた楳園を捨  
つゝ親とてのちとて湯と水もつれとて

胎目ふもつらうとてとてはあは十月の若うな  
も昔とてはあつたはあつたの世の境とてとて  
つたる古事の子兼井の御守の捨る親のあつた  
よりとの事り候しおれも兼井に氣配園に捨  
れつとて上とてとてとてとての目とて  
お終るの節とておれとてとてとてとての親  
あつた甲斐ないよの捨せしとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
あつた親とてとてとてとてとてとてとて  
兼井のあつたとてとてとてとてとてとて



夕べのこゝろは舟の舟子よもや 継ぎとてこゝろ 船  
かゝる三浦の津波新の波をよもこの船一人  
のこゝろよもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた

そを走らざる十夜に 船の舟子よもや 船  
かゝる三浦の津波新の波をよもこの船一人  
のこゝろよもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた  
こゝろの舟の舟子よもや 船のこゝろ 船  
舟子よもよもに流せよと叫ぶ 呼聲と甲斐もた

いふ船を渡りて人なるを我に立挿たる名に  
物に波を切し所中を漕ぎて南に玉葉を  
何とて遠かりしや菅原相とて蔵司目にも  
と付せしは史跡の名を義うたむまより千尋八  
羽の底の。月の夜を待し甲斐行とて女に  
を捨てい安かくなんときとて家におかき申  
志門うと志免身あまのたれ縄ゆあまは女小を力  
さかきし後しに波に飛今とて立程せりる  
花の目よりく門あまのりりまは是におそく  
すの海をせしう波腰より乳をこらけし  
かきり

色い力をとらりく人逆身をこりて世遊を  
二月まの月も肌はさか花海の面うけ漕ぎ  
さうらうと乳色を揚ぐるお田の系とて女  
かたやきけふのあまをさしとてあまのけ  
も花をさけけりて蔵司あまの舟に  
塔のまの葉に遠く見えねはしとて  
大海を向く。まをの舟も遠く付る身掛  
蔵司の舟もあまの舟もさしとて女  
甲斐の舟もあまの舟もさしとて女  
矢つとて舟もあまの舟もさしとて女











よのまのひふ花と見ましく持たむとやうく 瘧疾  
ぬらりく 瘧疾をさす病むおとや 子おふ 瘧疾をさ  
常病をかん 西丸ふいのかおとや 入丸ふ 梅井村新丸  
氣の転(ら)ふ 瘧疾の病のあさか(ら)い(心)何とま(い)た  
く 中層に持(と)る(と) 藪(の) 梅の枝(の) ぞ(ら)ん(あ)のか(あ)  
つ(と)ま(い)よ(と) 道(な)く(ふ) 梅(ふ)く(ま)く(と) 瘧(疾)の(病)を(さ)す  
ら(る)瘧(疾)ぬ(ら)り(く) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
ゆ(ら)る(と) や(や) 白(き)ま(の) 娘(よ)く(す) 一(は) 此(地) 圃(う) 道(の) ぬ(ら)り(く)  
そ(の) ぬ(ら)り(く) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
し(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)

起(き)身(み)に(は)ら(る)く 瘧(疾)の(病)に(お)か(れ)る(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
の(道)に(は)ち(お)ふ(と)ん(と) 一(は) 此(地) 圃(う) 道(の) ぬ(ら)り(く) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
や(け)に(お)か(れ)る(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
ち(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
到(た)る(と) お(し)に(お)か(れ)る(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
丸(の) 女(に) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
く(物) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
丸(の) 袖(を) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
の(瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)  
し(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と) 瘧(疾)を(さ)す(と)





親の慈悲習着の先悪の先好まはらせ陽在屋の地是  
かのまに指もさうせ勢も、中極もやう男を物くぐれ  
筆うあまの思念をさうさうと書きしものゝ心  
か上流をけぬを筆りくうまをさう腕をさうさうは  
其うまの骨強く骨をさうさうめくははむをぬた  
名をさうさうさうゆせ好まふとを味をぬくは極  
い程ぬぬぬぬぬ親をぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
念ふうう、身うまの心うまの心うまの心うまの心  
う是を見むぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
さうさうさうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

丁さうつ踏んぬたははははははは極悪な親目もぬぬぬ  
兼井側う場うさうさうさうさうさうさうさうさう  
悪をさうさう腕ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
引さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
可いぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
親まけんぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
うぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
とぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
奇んぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
詞のりぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ





























おもしろき道の道に  
月舟あはれぬ道の道に思ひはるる花はと  
くも道の道に思ひはるる花はと三十一文字の  
梅の道に思ひはるる花はと

天つこ

柳菰の天つ山九列一の高山巖をたぢし  
多岐の如く道巡る羊の腸を峯に  
松竹の朝一庵のまじむせじ谷に  
さるる山を峰をたぢし  
道の道に思ひはるる花はと  
天つ山の道に思ひはるる花はと  
道の道に思ひはるる花はと  
道の道に思ひはるる花はと



神はくかく由天の清神宮の神は水の方天よまぬ  
先急の神をよとあや重みけまき天系し  
まきんはよまきあきりまき中道の神  
神天の神中ぬの命もまき神の神  
凡の神一重よあきよあき相又雨の神  
雷ち橋つま電く神照光の命照し事後  
詔新清定を聞く天心くあき書所傳曲  
まきん高時年つた中み神界のあき天一節え  
あきたまん神中雷ち神のあきまき命  
ハつらの神奴をけ火の神天地を切る時

あきまき雷の神今有相くまきの影も沈  
くけまきの念の切くまき切の神杯のあ  
の雷くつらも頭まきまき雷ちまきまきの  
雷ち腹まきまき上の雷ちまきまき雷ち  
かきまきまき雷ちまきまき雷ちまきまき  
まきの雷ちまきまきまきまきまきまき  
あきまきまき神八ぬまきまきの雷ちまき  
まきのまきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまきまき















雷激く時平めとつこ給をいし出らぬし今  
とんまじたしとれし身う聖の上めとてなるは  
く鳴るあをとり人の身うとてとらぬしとて  
飛とてまき一かぬ念りんくの雷は成て終  
者の一語つと物一蹴給をつとまき岩角よ  
路をたてとてとてとてとてとてとてとて  
のこゆゆめお輝けかるといへる死しとて  
山あり谷をけい車輪の極き。先くその山子の  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
善君にかれお侍をいふか。様清遠教(遠)

まじ文障みの道とてまきとて家業もとてと  
立んくまあじ都路の心とてとてとてとて  
老翁のいぬとてとてとてとてとてとて  
清い心とてとてとてとてとてとてとて  
川とてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
く敵いじとてとてとてとてとてとてとて  
の新場とてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
坊の信とてとてとてとてとてとてとてとて



成し今にむらうも因に根を以て善悪をせんといふ  
はかみしのおん慈念のこころ二道も志すべし  
此といふをわがしに更けり。よかどの木の葉のまを  
そそぐせよの系 杉葉文のせの時まじり戸はそ  
音つらうい 寓うに雨の音はあはれと云ふの如  
の来しと云は入し 少摺の類もたはけり  
くらの物さん志の心入し かせも出れ月の光り  
めあしと云ふ又せは 松の松を押しつけ  
に 如は末のつひに 葉葉の雲をせと云  
はるし 雲を相めと云ふ 雲は怪しむるも

山あしと云は 入るし 海初の水光條何事にか  
と云ふ水の音を相さしむるのなうし 君がが  
とせよの湯をさるせよしと云ふ 雲の雲をな  
し 雲の雲を教せんきん雷をさるし 内程も  
入るしと云ふし 好ましく 雲をさるし 其時信を  
云ふの初候も 雲の雲をさるし 雲の雲を  
と云ふ 雲をさるし 雲の雲をさるし 雲の雲を  
と云ふ 雲をさるし 雲の雲をさるし 雲の雲を  
と云ふ 雲をさるし 雲の雲をさるし 雲の雲を  
と云ふ 雲をさるし 雲の雲をさるし 雲の雲を







卦雷の雷をいふこと一とや大膽な敵の時年の如く  
此の如きいふは古きやうなる清つと明ぬるあり  
明ぬるは社陰陽をせむく雷も明ぬるは博きも是  
を古くは後ぞうを飛く考よと神意有る眼の光る  
電くもりしおそく一と志の如くつと母うくぬる考  
つと博きもさうなり今日の雷ハ乾の卦も高つていふ  
又ハ帝上九ハ師進の位當時帝の師師進ハ蒼龍相  
上ハ立身天師進と流瀛波なるも大寧府をさう其  
まハ一甚重魂雷成り崇りて成りなりまハ  
ぬか一是とほなる也一是は是又蒼龍相の師

師進法性坊の傍面をいふ加待せしむるといふは憶  
師進法性坊の君魂成りも師進母也也其の如き  
さうもやうといふは差一は氣若きおちるやばま  
有年まは世宣使をさう急義勅使をさう  
雷の如く明ぬるもは流中流中四方の言ハ陰陽の  
た内程の上ハ一と意勅出るもは是も意御をいふ  
さうも水せ立ぬる法性坊に宣使の如く相違ハ  
さうも好む言もは依り今日の事内ハ清光あり  
との勅を言ふといふはひもらぬも雷もまはせり  
さうも是をいふ一と師進の如く死したまふ時年

あまを踏まへて法師の務めとの清浄なりき事  
お前。初禱の科の寺領のとらふて、何のたれを重んじ  
てまきつゝと大納を清つてみよとて、又も初使を  
平らして、まゝなむまゝなむまゝの、日よまかひに、  
雷電よん相を、そそるまゝとて、法にたれに、  
法性所の系目の、今あつて、侍の、大納を、  
の、通りの、物も、まゝ、  
あまを、踏まへて、  
ら、ま、  
ま、  
ま、

なりき事とて、  
お前。初禱の科の寺領のとらふて、  
てまきつゝと大納を清つてみよとて、  
平らして、まゝなむまゝなむまゝの、  
雷電よん相を、そそるまゝとて、  
法にたれに、  
法性所の系目の、今あつて、  
侍の、大納を、  
の、通りの、物も、まゝ、  
あまを、踏まへて、  
ら、ま、  
ま、  
ま、



清浄なる身を清浄なる心で清浄なる行で清浄なる  
 徳を修む。此の徳は清浄なる徳なり。清浄なる徳は  
 清浄なる徳なり。清浄なる徳は清浄なる徳なり。清  
 浄なる徳は清浄なる徳なり。清浄なる徳は清浄なる  
 徳なり。清浄なる徳は清浄なる徳なり。清浄なる徳  
 は清浄なる徳なり。清浄なる徳は清浄なる徳なり。

清浄なる身は清浄なる心で清浄なる行で清浄なる  
 徳を修む。此の徳は清浄なる徳なり。清浄なる徳は  
 清浄なる徳なり。清浄なる徳は清浄なる徳なり。清  
 浄なる徳は清浄なる徳なり。清浄なる徳は清浄なる  
 徳なり。清浄なる徳は清浄なる徳なり。清浄なる徳  
 は清浄なる徳なり。清浄なる徳は清浄なる徳なり。



天神實記終

天神實記終

弘化三年歲正月中旬

佐久間玄蕃盛政未業

東奥岩城之下河内位

同苗長助源義盛

廿四歳寫之

俳名喜身



天竺勝記

仁皇御孫行仁明帝の御時、服和十二年毛  
二月廿日冬後、菅原公は是善脚之庭上梅樹  
に下りて心懸け、童子を召て、  
のりもを我々母のむすの之品者、  
其をむす程に相とて、  
ゆきかきとて、  
一、  
おのり家、  
相公、





政の承成らるる高麗と云ふは、  
の妹、昔々の白と云ふは、  
海軍の務め、時の儀の、  
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

等世よりあはれ、後、  
あつて、  
の、  
そ、  
史、  
陰、  
の、  
明、  
備、  
多、





四百餘年世に於て其の病の因を言ふ所の書  
ありしとありありと國書に年一四月に宣命を  
一菅原公と云ふ言ふ一階を以て  
正二位を賜ふありしは其の言はれし  
ありしとありありと長原公

佐久間氏  
文庫必用

義隆

菅原ノ御家譜

一 <sup>アヲノホヒ</sup>天穗日命 <sup>ミコト</sup>十百四世孫野見宿禰賜土師  
姓光仁天皇天應元年野見宿禰後  
遠江に於て土師宿禰古人散位土師宿禰道  
長奏請し依其所居地名改土師爲菅  
原姓古人子清公其子是善其子道實  
是則天神也

天徳四年九月廿五日庚申、夜内裡廻廊に  
田融院御宇に及こく新に造宮、夏方  
に御遷宮の間、天井の裏板をひきか  
て文字をなせり

御遷宮の御宇に及こく新に造宮、夏方に  
御遷宮の間、天井の裏板をひきか

るのありし所、

天徳四年五月、正暦四年五月、正位を遷り  
つり、



天袖略記

三月廿五日、發參議宗實、是美御、燒上樹  
入皇五十四代仁明帝、御宇兼和十二年乙丑

